

みんなちがって みんないい～（その7）
～共生社会をめざして～

2つ以上の動きを組み合わせることを「協調運動」と言います。この運動を行う際、円滑に体を動かすことが苦手な人がいます。例えば、「定規を使って、必要な線が引けない」「コンパスや分度器が上手く使えない」「リコーダーの指使いが上手いできない」「字がマスからはみ出てしまう」「跳び箱や縄跳びが・・・」「球技が苦手・・・」など、思い当たることはありませんか？

学習の場面だけでなく、「靴の紐がうまく結べない」「ズボンを履く際に、座らないと履けない」「食事の時、食べこぼしてしまう」「舌の長さなどに問題はないが、滑舌が悪い」など、生活場面でも協調運動が必要な動作は数え切れないほどあります。

どの動きも、実は複雑な運動を組み合わせで行っています。視覚・聴覚・触覚・平衡感覚、筋肉や骨の使い方、距離感など様々なセンサーをうまく調節し、一瞬で丁度良い状態で動かすことで、人の動きは成立しています。

このように協調運動がうまくできないことを、「発達性協調運動症」と言います。

発達性協調運動症は脳の中樞神経系の機能障害によって起こると推測されていて、発生率は5%～6%程と言われています。また、これまで話してきました、他の発達障がいと重複していることが多いことも良く知られています。

ちょっと不器用で、日常生活や学習に大きな支障が無ければ良いのですが、発達性協調運動症の場合「練習不足・努力不足」と誤解され、無理に練習を強いられていることがあります。その結果、劣等感や疎外感が生まれてしまいます。

これまでお話してきた発達障がい同様、発達性協調運動症は成人にも見られます。成人の場合、仕事でミスが続いたり、家事が上手く行かなかったりすることで、抑うつや不安・緊張が発現しやすくなります。

発達性協調運動症は、練習を繰り返し行ったからといって、課題が完全に解消されるということはありません。練習の取り組み方次第によっては、先に述べたように劣等感や疎外感を生む可能性が高まります。

発達性協調運動症の改善には、子供が抱える苦手さの原因を分析し、一人一人に合った動きの練習や、課題や教材・道具の工夫によって、苦手さ困難さを軽減することが大切です。

前回の「感覚調整障害」でもお話ししましたが、このような練習を行う場が療育であり、本校では「まなびの教室」や「なづみ学級」で行っています。

療育等を受けたからと言って、すぐに改善できるわけではありません。スモールステップで、少しずつ特性を改善していきます。何よりも、楽しく行わなければ能力の改善は期待できません。

そして一番大切なことは、自分の苦手さ・特性を知り、どうすれば困り感を軽減できるかを学ぶことで、今後の生活に自ら対応できる力を養うことです。

I P S細胞を発見し、ノーベル賞を受賞した山中伸弥教授をご存知だと思います。山中教授は、学生時代に何度もケガや骨折を繰り返していたことから、整形外科の道へ進みました。しかし、研修医時代に他の医師よりも不器用で技術に劣ることを実感します。当時、周りから「じゃまなか」と呼ばれていたエピソードは有名です。

そこで山中教授は研究者としての道を選び、偉大な功績を残しました。

山中教授は周りより少し不器用だということを自覚し、自分に合った道を選択することができたとも言えます。

全ての子供に、いずれ職業選択をしなければならない時が来ます。様々な特性についてお話してきましたが、自分に合った職業選択ができると、自己肯定感を損なうことなく、自信をもって生きていくことができると思います。

人にはみんなそれぞれ個性があり、得意不得意の特性があります。私たち子供に携わっている大人がこれらのことを理解し、子供の可能性を伸ばし、いきいきと笑顔で生活できる未来へと繋げていきましょう。

※参考文献 「みんなちがって みんないい」

平戸市立田平北小学校 木村 栄 指導教諭

（文責 特支CO 山下 健一）